



Title	前位形容詞の有標配列について
Author(s)	山田, 善久
Citation	独語独文学科研究年報, 6, 49-67
Issue Date	1980-05
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/25552">https://hdl.handle.net/2115/25552</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_P49-67.pdf



# 前位形容詞の有標配列について

山 田 善 久

## 0. 序

複数個の形容詞が付加語として名詞の前に置かれる場合、その配列順序に一定の規則性が認められる。Engel ( 1970 ) は、個々の形容詞を分類して基本配列 ( Grundfolge ) のクラスを確定することにより、この規則性を説明している。

ところで、前位形容詞が常にこの基本配列に従って並べられるかということ、必ずしもそうではなく、逸脱した語順をとる場合がある。基本配列に従った語順を無標配列と呼ぶことにすると、これはつまり有標配列の場合である。この有標配列の現象は、筆者の知る限り従来ほとんど顧みられることがなかったように思われる。

そこで、本稿では、この有標配列の問題について、とくに配語現象と各形容詞がもつ意味的機能との係わり合いという観点から、考察してみたいと思う。

## 1. 無標配列と有標配列

はじめに Engel ( 1970 ) があげている基本配列のクラスを少し修正し、簡略化したかたちで掲げてみる<sup>1)</sup>。

A<sub>1</sub> = Numeralia

(beid-, bestimmt-, einig-, etlich-, etwelch-, gewiß-, manch-,  
mehrer-, sämtlich-, verschieden-, viel-, wenig- および基数)

A<sub>2</sub> = (ander-, weiter-)

A<sub>3</sub> = Anaphorika

(ähnlich-, andersartig-, derartig-, gleich-, gleichartig-,  
solch-, ebensolch- および序数)

A<sub>4</sub> = textreferentielle Anaphern

(angegeben-, angeführt-, aufgeführt-, behandelt-, behauptet-,  
besagt-, diesbezüglich-, erörtert-, erwähnt-, folgend-,  
genannt-, obig-, obenstehend-, untenstehend-, zitiert- など)

A<sub>5</sub> = temporale Adjektive

(augenblicklich-, baldig-, damalig-, derzeitig-, diesjährig-,  
ehemalig-, früher-, gestrig-, gleichzeitig-, jetzig-,  
jeweilig-, morgig-, rechtzeitig-, zukünftig- など)

A<sub>6</sub> = lokale Adjektive

(dasig-, dortig-, hiesig-, jenseitig-, link-, recht- など)

A<sub>7</sub> = Qualitativa

(groß-, klein-, mangelhaft-, schlecht-, zuverlässig- など, および  
gewaschen-, verloren-, zersetzend- などの分詞)

A<sub>8</sub> = Farbadjektive

A<sub>9</sub> = Stoffadjektive

(eisern-, golden-, hölzern-, irden-, seiden-, wollen- など)

A<sub>10</sub> = Adjektive-Autor

(Adenauersch-, Goethesch-, Rilksch-)

A<sub>11</sub> = Adjektive-Herkunft

(Hamburger-, hamburgisch-, niederländisch- など)

A<sub>12</sub> = allgemein-referentielle Adjektive

(grammatisch-, linguistisch-, philosophisch-, politisch- など)

前位形容詞は、通例、この基本配列のクラスに従って、名詞句内部において次のように順序づけられる<sup>2)</sup>。

Det - A<sub>1</sub> - A<sub>2</sub> - A<sub>3</sub> - A<sub>4</sub> - A<sub>5</sub> - A<sub>6</sub> - A<sub>7</sub> - A<sub>8</sub> -

A<sub>9</sub> - A<sub>10</sub> - A<sub>11</sub> - A<sub>12</sub> - N (Det = 限定詞、N = 名詞)

有標配列は、この規則が破られた場合に成立する。序でも述べたように、この現象は、その理論的  
解明はもとより、具体的事実の観察についても、これまでほとんどふれられることがなかった。わず  
かに Engel (1970、1977) において、有標配列が広範にわたって可能であることが指摘され、  
断片的に次の各例が示されているに過ぎない<sup>3)</sup>。

- (1) { (a) fünf weitere Vögel  
(b) weitere fünf Vögel

- (2) { (a) der große Dürkheimer Wurstmarkt  
(b) der Dürkheimer große Wurstmarkt

- (3) { (a) warme wollene Socken  
(b) wollene warme Socken

- (a) die drei philosophischen Fragen  
 (4) {  
 (b) die philosophischen drei Fragen

上の(a)(b)のうち、(a)は無標配列、(b)は有標配列の場合である。

有標配列は、それ自体いわば例外的な現象と考えられるので、何らかのテキストから、この具体例を拾い出すというのは、かなり困難な作業である。しかし筆者の観察からは、これを形成する典型的なタイプとして、次の二つの場合が認められる<sup>4)</sup>。

A、数詞(とくに基数)を含む構造

- (5) die letzten tausend Jahre  
           A<sub>3</sub>          A<sub>1</sub>
- (6) die nächsten zwei Wochen  
           A<sub>5</sub>          A<sub>1</sub>
- (7) die vergangenen 2 Milliarden Jahre  
           A<sub>5</sub>          A<sub>1</sub>

B、拡大付加語(冠飾句)を含む構造

- (8) die in Wien liegende erste Niederschrift  
           A<sub>7</sub>                  A<sub>3</sub>
- (9) in Mitleidenschaft gezogene andere Menschen  
           A<sub>7</sub>                          A<sub>2</sub>
- (10) die wegen Kriegsverbrechen verurteilte ehemalige Angehörige  
   A<sub>7</sub>                          A<sub>5</sub>
- (11) beträchtlich finanzielle und vielfältige andere Hilfen  
   A<sub>7</sub>                          A<sub>2</sub>

図で示したように、Aの各例(5)(6)(7)では、先の基本配列におけるクラスA<sub>1</sub>に属する数詞tausend, zwei, 2 Milliardenに、それぞれ(5)の場合はクラスA<sub>3</sub>のletzten-が、(6)(7)の場合はクラスA<sub>5</sub>のnächsten-, vergangen-が先行している。Bの各例(8)(9)(10)(11)では、特性記述容詞(Qualitativa)と同様にクラスA<sub>7</sub>に属すると考えられる拡大付加語が、(8)の場合はクラスA<sub>3</sub>に属するersten-に、(9)(11)の場合はクラスA<sub>2</sub>に属するander-に、(10)の場合はクラスA<sub>5</sub>に属するehemaligen-に、それぞれ先行している。

以下、これらの例をもとに、有標配列の現象を考察していくことにする。

2. 名詞付加語の意味的機能

関係文が、それが表わす意味によって、二つの用法に大別されるという事実はよく知られている。

いわゆる制限的用法と非制限的用法の差異である<sup>5)</sup>。例えば、次の例文⑫、

⑫ Genitivattribute, die nicht auf Relativsätze zurückgeführt werden können, verlangen eine besondere Erklärung.

は、当該関係文の用法上の差異に関して、二通りの解釈が可能である。一つは制限的用法としての解釈で、この場合⑫は⑬のように書き換えることができる。

⑬ Diejenigen Genitivattribute, die nicht auf Relativsätze zurückgeführt werden können, verlangen eine besondere Erklärung

つまり、「(すべての二格付加語のうち)、関係文に帰せられない二格付加語は、特別の説明を要する。」という読みである。もう一つは非制限的用法としての解釈で、この場合⑫は⑭ないしは⑮のように書き換えることができる。

⑭ Genitivattribute, sie können nicht auf Relativsätze zurückgeführt werden, verlangen eine besondere Erklärung.

⑮ Genitivattribute können nicht auf Relativsätze zurückgeführt werden, sie verlangen eine besondere Erklärung.

つまり、「二格付加語は、(すべて)関係文に帰せられないものであり、特別の説明を要する。」という読みである。

以上で明らかのように、制限的用法の関係文は、一般に、先行詞によって表わされる概念の適用範囲を制限し、一定の部分集合に言及するという機能をもつ。一方、非制限的用法の関係文の場合は、このような部分集合に言及するという機能はもたず、先行詞が指示する対象物の特性を、補足的に記述し、説明する機能をもっていると考えられる。

Motsch (1968) は、同じような制限的用法と非制限的用法の対立が付加語的形容詞の場合にも認められることを指摘している<sup>6)</sup>。例えば、次の例文⑯、

⑯ Die bellenden Hunde beißen nicht.

は、付加語的形容詞 bellend- が制限的と解釈されるか、非制限的と解釈されるかによって、二通りにあいまいであるという。すなわち、「(すべての犬のうち)吠える犬は、噛まない。」というのが制限的な解釈であり、「犬は(すべて)吠えるものであり、(かつ)噛まない。」というのが非制限的な解釈である。

以上の例はいずれも、先行詞が概念のクラスを指示する、つまり総称的な場合であるが、先行詞が非総称的な場合も同じことがあてはまる。例えば、次の例文⑰、

⑰ Die Zigarette, die angebrannt ist, liegt im Aschenbecher.

において、先行詞 Zigarette は動詞句 liegt im Aschenbecher の意味的特性から考えて、非総称的な名詞と解釈されるが、この場合にも、上述の制限的用法と非制限的用法に関して両義性が認

められる。すなわち、この発話の前提として、「いくつかのタバコがあって、その中には‘火のついたタバコ’と、‘火のついていないタバコ’の二種類がある」といった文脈があり、話し手が、そのうち‘火のついたタバコ’について、「火のついた<sup>方</sup>のタバコは、灰皿の中にある。」という主張がおこなわれている場合が制限的な読みである。一方、このような文脈が存在せず、単に、「火のついたタバコがあって、それは灰皿の中にある。」、あるいは「(ある特定の)タバコが灰皿の中にあつて、それには火がついている。」という主張がなされているに過ぎない場合が、非制限的な読みである。上の⑬とパラフレーズの関係にあると考えられる付加語形容詞を含む次の例文⑭、

⑭ Die angebrannte Zigarette liegt im Aschenbecher.

においても、関係文の場合と全く同様の両義性が存在する。

このように、一般に、関係文や付加語的形容詞を含む名詞句は、これらの付加語が制限的に用いられているか非制限的に用いられているかに関して、両義的である。そしていずれの解釈が可能かは、もっぱらのその発話状況に係わっている。しかしながら、文法上の手段によってこの差異を明示することも不可能なわけではない。この文法的手段として、一般に認められているのは、イントネーションと限定詞の分布上の相違である<sup>7)</sup>。

まずイントネーションの関係をみると、非制限的關係文では、制限的關係文に対して、関係文の前後に発話の切れ目 (Junktur) があらわれる。一方制限的關係文の場合は、こうした切れ目はあらわれないが、限定詞 (および関係文が述語的形容詞を含む Kopula-Satz の場合には、その述語的形容詞) に強勢が置かれる。

- ⑮
- (a) Die Zigarette + die <sup>á</sup>ngebrannt ist + liegt im Aschenbecher.  
(= 制限的用法)
  - (b) Die Zigarette / die angebrannt ist / liegt im Aschenbecher.  
(= 非制限的用法)

( / は Junktur を示し、 ++ は Junktur が ない、つまり 接合的 (enklitisch) な イントネーション を示す。 )

付加語的形容詞の場合も同様にイントネーションの差異が存在する。すなわち、制限的用法では形容詞に第一強勢が置かれるのに対して、非制限的用法では、上位名詞に第一強勢が置かれる。

- ⑯
- (a) Die <sup>á</sup>ngebrannte Zigarète liegt im Aschenbecher.  
(= 制限的用法)
  - (b) Die àngebrannte Zigarète liegt im Aschenbecher.  
(= 非制限的用法)

次に限定詞の分布上の相違をみると、all-, manch-, kein- など非特定のな意味をもつ限定詞がある場合には、制限的用法としての解釈しか許されない。例えば次の例がそうである。

- (a) Alle Hunde, die bellen, beißen nicht.  
 (21) { (b) Alle bellenden Hunde beißen nicht.

- (a) Manche Hunde, die bellen, beißen nicht.  
 (22) { (b) Manche bellenden Hunde beißen nicht.

一方、(23)(24)にみられるように、指示代名詞 (dieser, jener) や所有代名詞 (mein……) など特定物を指示する機能をもつ限定詞がある場合には、非制限的用法としての解釈しか許されない。

- (a) Diese Schuhe, die bequem sind, ziehe ich an.  
 (23) { (b) Diese bequemen Schuhe ziehe ich an.

- (a) Jene Schuhe, die bequem sind, ziehe ich an.  
 (24) { (b) Jene bequemen Schuhe ziehe ich an.

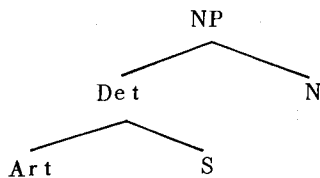
もちろん(25)のように、先行詞が固有名詞である場合には、これ自体が唯一物を指示し、特定のであると考えられるので、関係文は非制限的と解釈される。

- (25) Günter, der mein Freund ist, will mich heute besuchen.

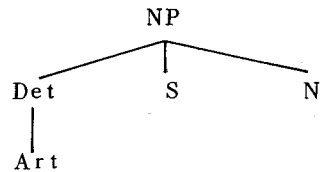
なお、限定詞が特定のな意味をもつ場合と非特定のな意味をもつ場合の両方の可能性があるタイプでは、定冠詞 *der*、不定冠詞 *ein* および無冠詞の場合を含めて、名詞付加語 (関係文、形容詞) は、とくに文脈の指定がない限り、原則的に、制限的用法としての解釈、非制限的用法としての解釈の、いずれもが可能であるということになる。

以上みたとおり、制限的用法の名詞付加語は、限定詞と密接な関係にあり、限定詞の意味を補うために用いられていると考えることができる。一方非制限的用法の名詞付加語は、このような限定詞との関係はなく、すでに指摘したように、先行詞の特性を付帯的に記述するという性格をもっている。Motsch (1965) は、このような特徴を踏まえて、制限的用法および非制限的用法の名詞付加語に、それぞれ次のような構造を与えている<sup>8)</sup>。

(26) 制限的用法



(27) 非制限的用法



つまり、制限的付加語は、*Det* に直接支配された *S* として、非制限的付加語は、*NP* に直接支配された *S* として、それぞれ導入される。

ところで、とりわけ付加語的形容詞については、以上の制限的用法と非制限的用法のいずれとも異なるもう一つの機能があるように思われる。すなわち、これが単に上位名詞が表わす概念の低位概念

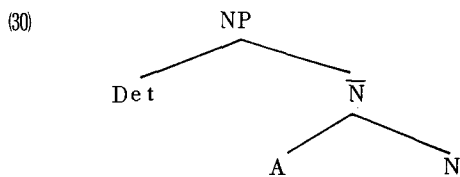
を形成するためにのみ用いられており、上位名詞をもっぱら分類的に制限している場合である。この最も典型的な例として、(28)のような構造をあげることができる。

- (28) tierische Fette, ein hölzerner Griff, die deutsche Grammatik,  
Kölnisches Wasser, ein Goethisches Gedicht, das väterliche Haus,  
der städtische Beamte, die wirtschaftliche Sicherheit

これらの例では、「形容詞 + 名詞」の構造が、あたかも一語名詞のように機能し、一種の「総体概念 (Gesamtbegriff)<sup>9)</sup>」を形成しているとみなされる。このことは、(29)のように、対応する一語名詞との書き換えが存在する例があることをみれば、一層明らかになると思われる。

- (29) roter Wein  $\longleftrightarrow$  Rotwein  
polizeiliche Aufsicht  $\longleftrightarrow$  Polizeiaufsicht  
zänkisches Weib  $\longleftrightarrow$  Xanthippe  
weißes Pferd  $\longleftrightarrow$  Schimmel

以上は、極端な例をあげたに過ぎないが、恐らくここであげた種類以外の形容詞を含む構造についても、その大部分がこうした機能的関係をもつ可能性があると思われる。そしてこれが付加語的形容詞のもっとも本来的な用法であると考えられる。いわゆる二格付加語や前置詞付加語を含む構造もこれと同じように考えることができよう。先の制限的用法の名詞付加語が限定詞の任意的補助部であるとするならば、これは上位名詞の任意的補助部として捉えることができる。この名詞付加語の第三の機能を「分類的用法」と名づけておこう。分類的用法の付加語的形容詞は、(30)のような構造をもつと考えられる。



これまでの考察で、名詞付加語の意味機能に、次の三通りの場合があることが明らかにされた。

- a) 制限的用法
- b) 非制限的用法
- c) 分類的用法

したがって、例えば(31)、

- (31) die gemäßigten Araber

のような名詞句は、この差異に対応して、三通りにあいまいであることになる。それぞれの読みを便宜的に日本語の訳語で対比させると次のようになる。

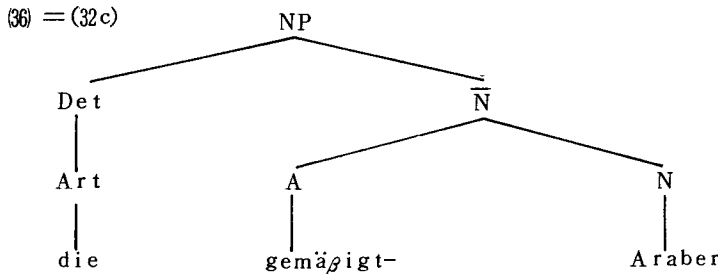
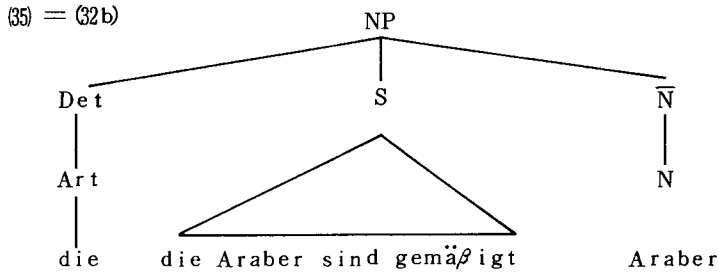
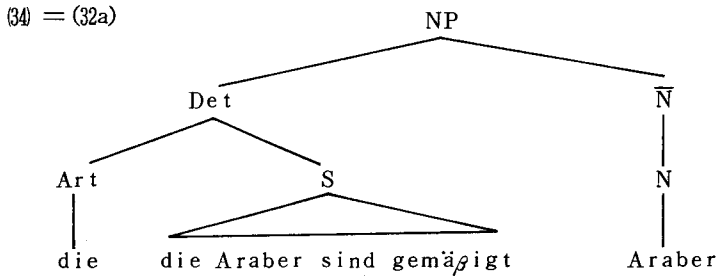
- (32) { (a) 「穏健な方のアラブ人」……制限的用法  
 (b) 「穏健なアラブ人」……非制限的用法  
 (c) 「穏健派のアラブ人」……分類的用法

ここでこれらと関係文構造との関係を見ると、次の(33)。

(33) die Araber, die gemäßigt sind.

のような関係文を含む構造にパラフレーズできるのは、(a)(b)の場合にのみ限られ、(c)の場合は不可能である。それゆえ分類的用法の付加語的形容詞は、基底関係文に帰せられるような派生的な構造ではなく、それ自体基底構造と考えるのが妥当であると思われる。

今、以上三つの場合について、それぞれの構造を与えると、次のようになるであろう。



### 3. 有標配列現象の解明

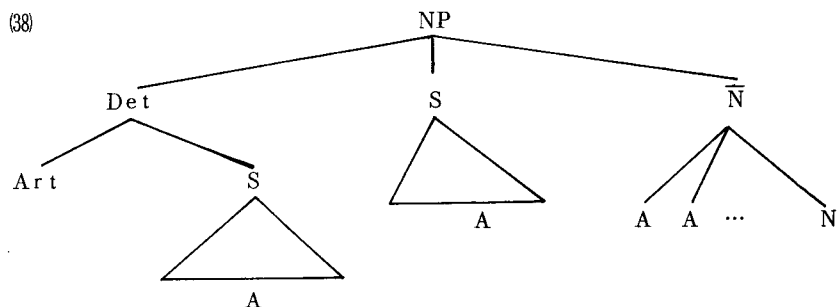
3.1 前章で明らかにした名詞付加語の3つの機能、制限的用法・非制限的用法・分類的用法はそれぞれ異なった構造として記述された。これは次の句構造規則によって定式化できる。

(37) NP  $\longrightarrow$  Det (S)  $\bar{N}$

Det → Art (S)

$\bar{N}$  → (A<sup>n</sup>) N

今、仮りに、これらの規則があますことなく適用されたとすると(38)のような句構造標識が生成される(埋め込まれたSには述語形容詞が含まれていると仮定する)。



もしこの構造に項目を移動するような変形規則が適用されないとすると、表面構造における各項目の位置的關係は、この派生構造が示しているものと全く一致するはずである。つまり、前位形容詞はその機能的差異に応じて名詞に遠い方から、制限的形容詞 → 非制限的形容詞 → 分類的形容詞の順序で秩序づけられることになる。

前章で、分類的用法が前位形容詞の本来的な用法であることを指摘したが、このことから、いわゆる無標配列というのは、各形容詞がすべて分類的に機能している場合と考えられる。つまり(38)の構造でいえば、 $\bar{N}$ に直接支配されたAとして導入される。それぞれの並び方は、第1章であげた基本配列のクラスに従う。

以上の考察から、有標配列の現象について一つの仮説を提出することができる。すなわち、

「前位形容詞群の一つが、制限的用法ないしは非制限的用法として機能し、それゆえ無標配列を形成している分類的形容詞群の前に位置づけられる。このことによって有標配列が成立する。」

3.2 具体例を観察することによって、この仮説を裏づけてみよう。第1章で指摘した有標配列の二つのタイプのうち、まず、A、数詞を含む構造(39)~(43)について考えてみよう。

(39) die letzten tausend Jahre (=5)

(40) die nächsten zwei Wochen (=6)

(41) die vergangenen 2 Milliarden Jahre (=7)

(42) die ersten beiden Turner

(43) die philosophischen drei Fragen (=4b)

これらをそのアクセントの面からみると、次の例(44)~(48)が示しているように、第1アクセントが可能なのは、有標配列を形づくっている左側の(名詞に遠い)形容詞の場合のみである。

- (44) { (a) die l<sup>e</sup>tzt<sup>e</sup>n t<sup>a</sup>usend J<sup>a</sup>hre  
 (b)\* die l<sup>e</sup>tzt<sup>e</sup>n t<sup>a</sup>usend J<sup>a</sup>hre  
 (c)\* die l<sup>e</sup>tzt<sup>e</sup>n t<sup>a</sup>usend J<sup>a</sup>hre
- (45) { (a) die n<sup>a</sup>chst<sup>e</sup>n zw<sup>e</sup>i W<sup>o</sup>chen  
 (b)\* die n<sup>a</sup>chst<sup>e</sup>n zw<sup>e</sup>i W<sup>o</sup>chen  
 (c)\* die n<sup>a</sup>chst<sup>e</sup>n zw<sup>e</sup>i W<sup>o</sup>chen
- (46) { (a) die verg<sup>a</sup>ngen<sup>e</sup>n 2 Milli<sup>a</sup>rden J<sup>a</sup>hre  
 (b)\* die verg<sup>a</sup>ngen<sup>e</sup>n 2 Milli<sup>a</sup>rden J<sup>a</sup>hre  
 (c)\* die verg<sup>a</sup>ngen<sup>e</sup>n 2 Milli<sup>a</sup>rden J<sup>a</sup>hre
- (47) { (a) die <sup>e</sup>rsten b<sup>e</sup>iden T<sup>u</sup>rner  
 (b)\* die <sup>e</sup>rsten b<sup>e</sup>iden T<sup>u</sup>rner  
 (c)\* die <sup>e</sup>rsten b<sup>e</sup>iden T<sup>u</sup>rner
- (48) { (a) die philos<sup>o</sup>phischen dr<sup>e</sup>i Fr<sup>a</sup>gen  
 (b)\* die philos<sup>o</sup>phischen dr<sup>e</sup>i Fr<sup>a</sup>gen  
 (c)\* die philos<sup>o</sup>phischen dr<sup>e</sup>i Fr<sup>a</sup>gen

前位形容詞を含む名詞句は、次の例 (49) (50)、

(49) die b<sup>e</sup>iden <sup>e</sup>rsten T<sup>u</sup>rner

(50) die dr<sup>e</sup>i philos<sup>o</sup>phischen Fr<sup>a</sup>gen

にみられるように、ふつう名詞に第1強勢が置かれる。このことからすれば、(44)~(48)にみられるアクセントの配置はかなり特異なものと言わざるを得ない。これは何を意味するのであろうか。前章で、制限的用法の付加語形容詞には第1アクセントが置かれるという事実を指摘したが、上の例はまさにその一例であるように思われる。すなわち、ここでは名詞に遠い位置にある形容詞 *letz-*, *nächst-*, *vergangen-*, *erst-*, *philosophisch-* がそれぞれ制限的に用いられていると考えるのが妥当である。

この事実は冠詞との関係を見ることによっても明らかになる。例 (39)~(43) は、いずれも複数を表わす数詞を含んでおり、不定冠詞 *ein-* とは共起できないので、この数詞を取り去った構造について冠詞との選択制限をみると、次のようになる。

- (51) { (a) das letzte Jahr  
 (b)\* ein letztes Jahr

- (52) { (a) die nächste Woche  
 (b)\* eine nächste Woche

- (a) das vergangene Jahr  
 (53) { (b) \* ein vergangenes Jahr
- (a) der erste Turner  
 (54) { (b) ein erster Turner
- (a) die philosophische Frage  
 (55) { (b) eine philosophische Frage

(54)(55) の場合はあてはまらないが、(51)～(53) においては、いずれもそれぞれの形容詞は定冠詞とのみ共起し、不定冠詞とは共起できない。つまりこれらの形容詞は特定の冠詞と結びつくという意味で限定詞と密接な関係を保っている。制限的用法の付加語が限定詞の任意的補助部として機能するということはすでに述べたが、上にみられる冠詞と形容詞の共起関係はまさにこの事実を裏づけているように思われる。

以上より、数詞を含む構造にみられる有標配列の現象は、前の形容詞が制限的用法として機能しており、冠詞の直後に位置づけられることによって引き起こされると結論することができよう。この結論はまた、仮説の主旨に対応するものである。(39) を例にとって、その意味的規定の関係を説明すると、次のようになる。すなわち、"tausend Jahre" によって表わされる概念の指示物は、その期間の Abgrenzung をどこに置くかによって無限にある。この無限個の "tausend Jahre" の集合の中から、話し手が、とくに「現在からみて過去 1000 年」という特定の部分集合に限定する意図をもって、letzter なる形容詞を制限的に用いているのである。他の例についても同じように考えることができよう。

ここで、例(39)～(43)における各形容詞の順序を入れかえた、つまり対応する無標配列の例(56)～(60)について観察してみよう。

- (56) \* die tausend letzten Jahre  
 (57) \* die zwei nächsten Wochen  
 (58) \* die 2 Milliarden vergangenen Jahre  
 (59) die beiden ersten Turner  
 (60) die drei philosophischen Fragen

例示されているように、この場合容認可能なのは(59)(60)のみで、(56)～(58)は容認不可能であるので、考察をもっぱらこの(59)と(60)に限ることとする。

(59)(60) について、そのアクセントの関係をみると次の二つの可能性がある。

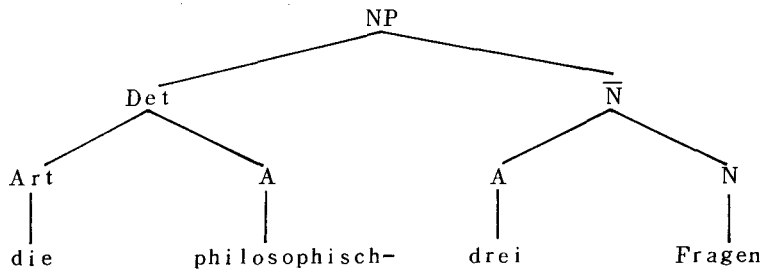
- (a) die beiden ersten Turner  
 (61) { (b) die beiden ersten Turner

- (a) die drèi philosòphischen Frágen  
 (b) die dréi philosòphischen Frágen

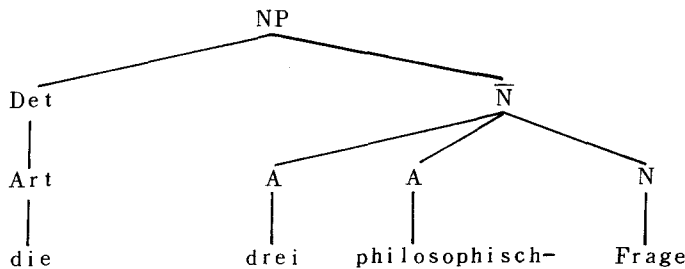
それぞれの(a)がノーマルなアクセントの配置であり、(b)は状況によって可能なアクセントの配置である。このうち(a)については普通の無標配列の場合であり、すでに述べたように、各形容詞は分類的に機能していると考えられる。一方、(b)については、最初の形容詞(この場合は数詞)に第1アクセントが置かれており、上で明らかになったように、制限的に機能していると考えられる。このことは、我々がこれまで、もっぱら表面構造の特質のみを注視して、無標配列として定義してきた構造が、実は、深層において意味の異なる二つの異形(Variant)に区別され得るという事実を示している。

ここで、まとめの意味で、例を(43)および(62a)、(62b)にとって、有標配列、無標配列、制限的用法が関与している無標配列の三つについてその構造を掲げてみよう。

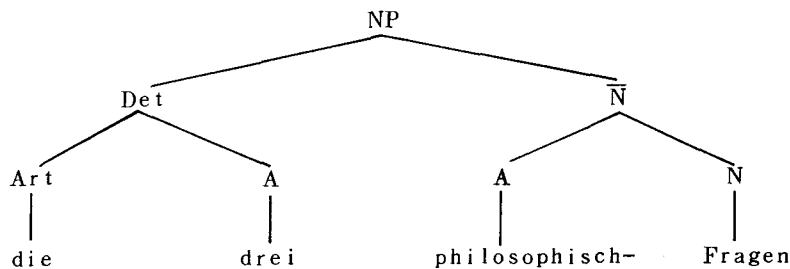
(63) 有標配列(43)の場合



(64) 無標配列(62a)の場合



(65) 無標配列(62b)の場合



3.3 次にB・拡大付加語を含む次のような有標配列の場合について考えてみよう。

(66) die in Wien liegende erste Niederschrift (=8)

(67) die wegen Kriegsverbrechen verurteilte ehemalige Angehörige (=10)

(68) beträchtlich finanzielle und vielfältige andere Hilfen (=11)

まずアクセントの関係をみると、この場合は有標配列を形づくっている拡大付加語に、第一強勢を置くかどうかは随意的で、次の例が示すようにいずれの場合も容認可能である。

(69) { (a) die in Wien liegende erste Niederschrift  
(b) die in Wien l'iegende erste Niederschrift

(70) { (a) die wegen Kriegsverbrechen verurteilte ehemalige Angehörige  
(b) die wegen Kriegsverbrechen verurteilte ehemalige Angehörige

(71) { (a) beträchtlich finanzielle und vielfältige andere Hilfen  
(b) beträchtlich finanzielle und vielfältige andere Hilfen

ここで、拡大付加語に第一強勢が置かれている(b)の例は、前の数詞を含む構造と同じように、制限的用法として機能しているために有標の語順が形成されていると解釈することができよう。しかし(a)の場合は第一強勢がないのでこのような説明は不可能である。

これはどのように説明されるであろうか。冠詞との関係をみると、この場合は、定冠詞、不定冠詞いずれの場合とも共起可能である。

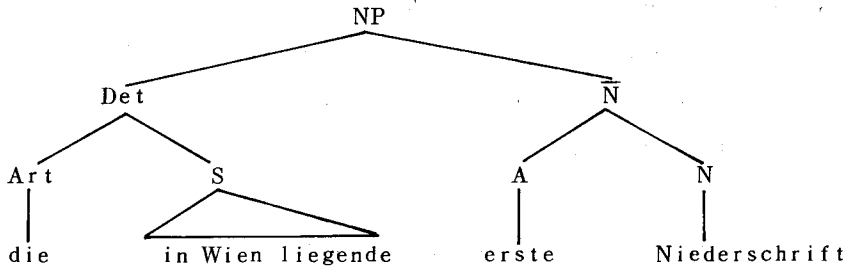
(72) { (a) die in Wien liegende erste Niederschrift  
(b) eine in Wien liegende erste Niederschrift

(73) { (a) die wegen Kriegsverbrechen verurteilte ehemalige Angehörige  
(b) eine wegen Kriegsverbrechen verurteilte ehemalige Angehörige

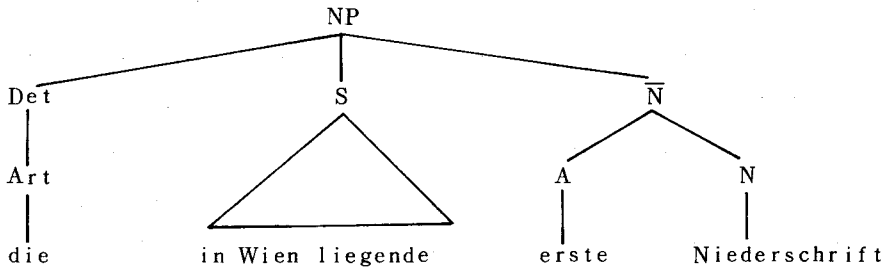
このように冠詞との関係が比較的自由である点、および上述のアクセントの配置から考えて、これらの付加語は、非制限的用法として機能しているという説明が妥当であると思われる。つまり、これらの例は、明示的なメルクマールがなく、有標配列であることによるのみ、一義的に非制限的用法と解釈される場合と考えられる。

以上の考察から明らかなように、拡大付加語を含む構造は、表面構造が同じである構造が、制限的用法、非制限的用法に関して両義性をもっている。このことは次の構造によって明示される。

(74) 制限的用法



(75) 非制限的用法



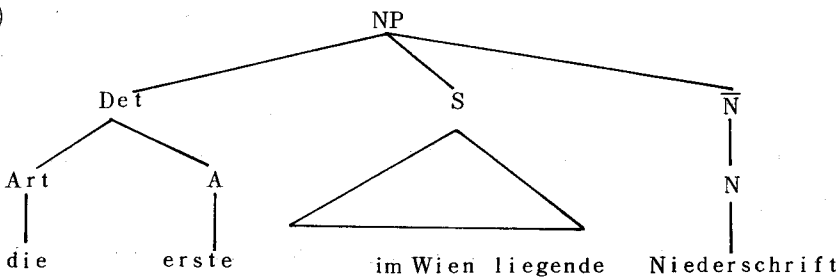
次に各形容詞の位置を入れかえた無標配列の例について考えてみよう。

(76) die erste, in Wien liegende Niederschrift

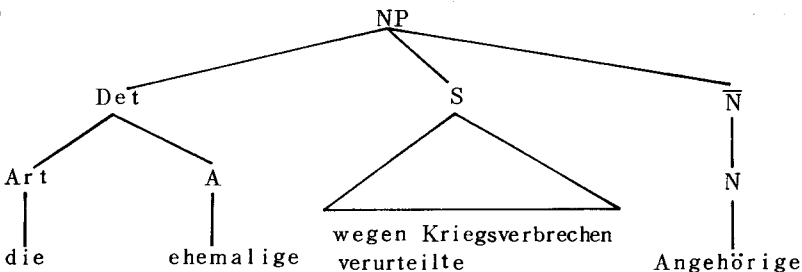
(77) die ehemalige, wegen Kriegsverbrechen verurteilte Angehörige

これらの構造では、左側にある最初の形容詞に第1強勢が置かれるのがふつうである。したがって、今度は左側の形容詞が制限的用法、右側の拡大付加語が非制限的用法と解釈される。(76)、(77)はそれぞれ(78)、(79)のような構造をもつと考えられる。

(78)



(79)



最後に、次のような関係文を含む構造について考えてみたい。

(80) die ehemalige Angehörige, die wegen Kriegsverbrechen  
verurteilt ist.

(80)は、実は付加語の意味機能に関して、三通りにあいまいである。これは(61) (62) (63) にみられるようなイントネーションの差異として表わされる。

(81) die ehemalige Angehörige + die wegen Kriegsverbrechen  
verurteilt ist + ……

(82) die ehemalige Angehörige / die wegen Kriegsverbrechen  
verurteilt ist / ……

(83) die ehemalige Angehörige / die wegen Kriegsverbrechen  
verurteilt ist / ……

つまり、これらの例における各形容詞の意味機能の関係をみると次のようになる。

	形容詞 ehemalig-	関係文 die wegen ……
(81)	分類的	制限的
(82)	分類的	非制限的
(83)	制限的	非制限的

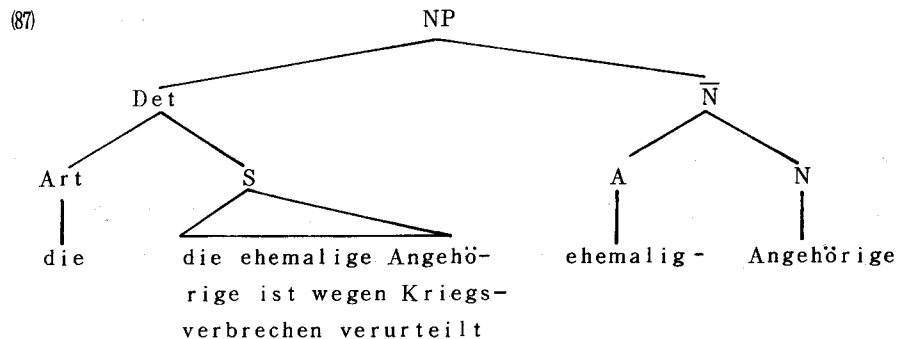
したがって(81) (82) (83)は、それぞれ次の(84) (85) (86)とパラフレーズの関係にある。

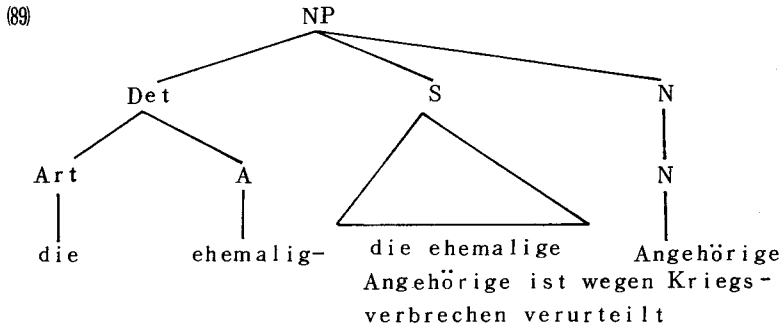
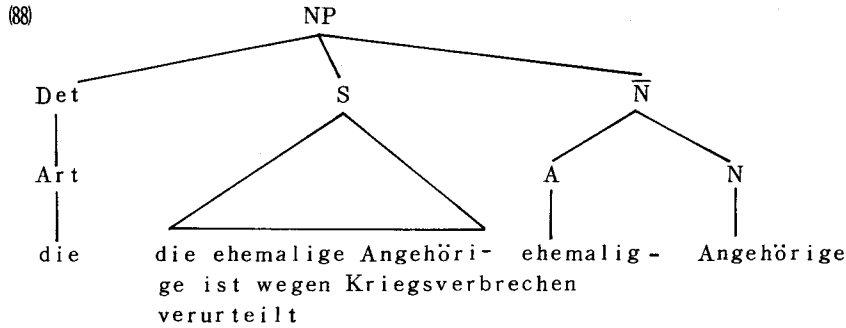
(84) die wegen Kriegsverbrechen verurteilte ehemalige Angehörige

(85) die wegen Kriegsverbrechen verurteilte ehemalige Angehörige

(86) die ehemalige, wegen Kriegsverbrechen verurteilte Angehörige

以上により、(80)の深属構造としては、次の三通りの可能性があるということになる。(80) (= (84)) の読みの場合は(87)、(82) (= (85)) の読みの場合は(88)、(83) (= (86)) の読みの場合は(89)によってそれぞれ示される。





(87) (88) (89) のそれぞれの構造に関係文形成変形が適用され、さらに関係文縮約変形が適用されると、それぞれ(84) (85) に対応する表面構造が生成される。この規則は次のように定式化することができる。

(90) 関係文形成変形

$$X_1 - [_{NP} X_2 - [_{S} X_3 - N - X_4 ]_S - X_5 - N ]_{NP} - X_6$$

SB 1        2        3        4        5        6        7        8         $\xrightarrow{\text{Obl}}$

SV 1        2         $[_{+REL}]^4$  # (3     $\phi$  5)    6        7        8

(  $X_i$  は変項、条件: 4=7 )

(91) 関係文縮約変形

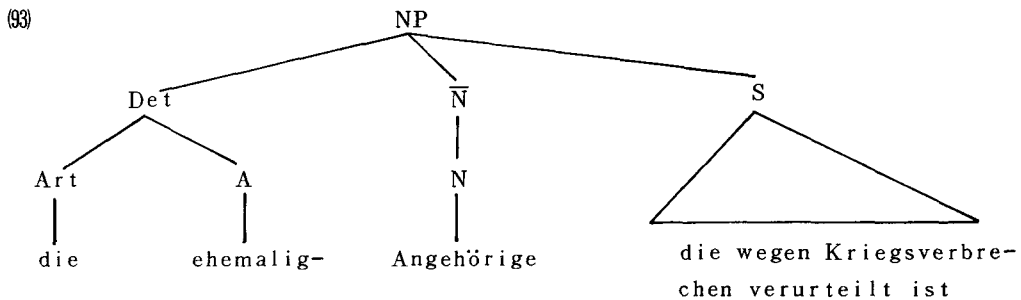
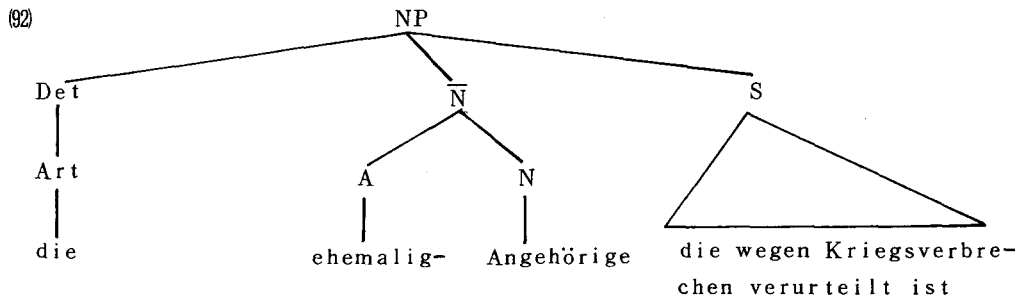
$$X_1 - [_{NP} X_2 - [_{S} [_{+REL}] - X_3 - (sei) Aux ]_S - X_4 - N ]_{NP} - X_5$$

SB 1        2        3        4        5        6        7        8         $\xrightarrow{\text{Obl}}$

SV 1        2         $\phi$         4         $\phi$         6        7        8

(  $X_i$  は変項 )

一方、関係文縮約変形が適用されない場合、関係文は義務的に NP の右方に押し出され、その結果、(87) (88) ではいずれの場合も次の (92) にみられるような構造が派生される。また (89) の場合は (93) にみられる構造が派生される。そしてこれらの派生構造は、いずれも、(80) の表面構造に対応している。



この規則は、次のように定式化される。

(94) 関係文右方移動変形

$$X_1 - [_{NP} X_2 - S - X_3 - N - X_4 ]_{NP} - X_5$$

SB	1	2	3	4	5	6	7	→ Obl
SV	1	2	∅	4	5	6+3	7	

( $X_i$  は変項)

以上の考察によって、有標配列の現象が制限的用法、非制限的用法、分類的用法という名詞付加語の意味的機能の差異に密接に関わりあっているという事実が明らかになった。さらにこのことは、各機能が名詞句内部で占める位置の違いによって、ごく自然に明示される。これは、それぞれの構造記述によってすでに示した通りである。

#### 4. 結 語

前位形容詞の配列順序は、個々の形容詞の意味的機能と深く関わりあっている。この配列順序と意味機能の関連性は、Engelがおこなっているように配語現象を、単に表面構造のレベルでのみ観察することによっては捉え切れない。とくに有標配列の現象は、深層構造のレベルを考慮することによってはじめて明示的な説明が可能となる。記述のレベルに関するこうした視座は、本稿の考察により明確に位置づけられたように思われる。具体例のより組織的な調査と、その理論的精密化はもちろん今後に残された課題である。

## 注

- 1) Engelがおこなっている本来の分類はもう少し詳しく、限定詞8クラス、形容詞8クラスを含めた16クラスが知られている。ここではそのうち本稿の議論と関連する部分のみをとりあげた。Engel(1970) S.98ff 参照。
- 2) Engel(1970) S.110 参照。
- 3) Engel(1970) S.111f および Engel(1977) S.137f 参照。
- 4) 拙稿「ドイツ語の限定的形容詞に関する一考察——累積構造と配列順序の問題について——」(1978年度 北海道大学修士学位論文)第V章参照。
- 5) 制限的關係文は必然的(notwendig)關係文、非制限的關係文は任意的(frei)關係文とも呼ばれる。例えばDal(1966) S.206f 参照。その他制限的用法と非制限的用法の差異については、Motsch(1965、1968)、Weber(1971)など参照。
- 6) Motsch(1968) S.65ff 参照。
- 7) イントネーションの面からの考察は、とりわけSeiler, H.: Relativsatz, Attribut und Apposition, 1960 が知られているが、筆者未読。Weber(1971)に、その簡単な紹介がなされている。
- 8) Motsch(1965) S.98 参照。
- 9) Grebe(1973)の用語。S.254、S.591 参照。

## 参 考 文 献

- Bolinger, D. (1967). "Adjectives in English: Attribution and Predication", in: *Lingua* 18, S.1-34
- Dal, I. (1966). *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. Tübingen.
- Engel, U. (1970). "Regeln zur Wortstellung", in: *Forschungsberichte des Instituts für deutsche Sprache* 5, S.9-148.
- Engel, U. (1977). *Syntax der deutschen Gegenwartssprache*. Berlin.
- Grebe, P. (Hrsg.) (1973). *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache* (Duden-Grammatik) = *Der Große Duden*, Bd. 4, Mannheim.
- Martin, J.E.; Ferb, T.E. (1973). "Contextual Factors in Preferred Adjective Ordering", in: *Lingua* 32, S.75-81.
- Motsch, W. (1968). *Syntax des deutschen Adjektivs* (= *Studia Grammatica*

3 ), Berlin.

Motsch, W. (1965). " Untersuchung zur Apposition im Deutschen "

(= Studia Grammatica 5, S. 87-132), Berlin.

Motsch, W. (1967). " Können attributive Adjektive durch Transformationen erklärt werden? ", Folia linguistica 1, S. 23-48.

Ross, J.R. (1967). Constraints on Variables in Syntax. unpublished Ph. D. dissertation, MIT, Cambridge/Mass.

Sommerfeldt, K-E.; Schreiber, H. (1977). Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Adjektive. Leipzig.

Sussex, R. (1974). " The Deep Structure of Adjectives in Noun Phrases ", in : Journal of Linguistics 10, S. 111-131.

Weber, H. (1971). Das erweiterte Adjektiv- und Partizipialattribut im Deutschen (= Linguistische Reihe 4 ) München.

Winter, W. (1965). " Transforms without Kernals? " in : Language 41, S. 484-489.

(大学院博士課程)